「海底ごみ目に見える化計画 2010」

環境学習会事業報告書

1. 事業趣旨

平成２１年夏、海守さぬき会は NPO 法人瀬戸内オリーブ基金との協働事業として「海底ごみ目に見える化計画」と銘打ち、①備讃瀬戸海域の海底ごみの実態を把握する。②市民に対し海底ごみの問題を提起し、排出抑制へ向けた啓発活動を推進する。③市民・行政の関係者が問題の全面解決に向け協議をし、回収から処理までの新たな方法を模索する事を目的として事業を実施しました。

結果、高松市内の４漁協の協力の下瀬戸内海の海底に沈む１３，０００余トンのゴミの現状を多くの市民に知ってもらう事が出来ました。

また、多くの漁業者からも海底ごみの一掃に向けた事業の永年的継続を望む声も聴かれると同時に、排出抑制のための幼少年期からの環境教育の必要性も強く感じ、今回小中学生向けの副教材にも使えるテキスト冊子の作成を計画しました。

まず、本年度は高松市内の中学生を対象に夏休みの自由研究にも使えるように、昨年同様、小型底引き網漁師さんの協力の下、実際の操業に海上タクシーを利用し、魚と一緒に引き揚げられる海底ごみの実態を見てもらい、（財）水島地域環境再生財団の研究員の先生等から、「海底ごみの現状と問題」と題する座学（２部構成）を開催致しました。

夏休みの自由研究として各自発表頂いた後に、担当教諭を中心に子ども目線で編纂し、各学校の授業でも使えるテキスト冊子を作成したいと思います。

ゴミの問題は、他人に起因するのではなく自ら排出しない努力をしなければならないと気づくことが最も大切であり、子ども達の目線に立ったテキストの作成に大いに期待する所です。

2. 事業実施概要

A）故郷の海の海底で何が起こっているのかを知ろう。

①８月３日の火曜日、高松市立高松第一中学校の２０名（１年生）の中学生を対象に、「海底ごみ目に見える化計2010」のスタートでもある小型底引網漁船を使った実態調査（写真①②③④）を男木島周辺海域で、海上タクシー2 隻に分乗して実施しました。

＜写真①、②　男木島北西海域にて漁師さんの海底ゴミと魚介類の分別を視察＞

＜写真③　分別回収海底ゴミの一部＞

＜写真④　底曳網引揚作業の視察＞

②事前学習として、視察見学前に同中学校社会科教室において、日本福祉大学の磯部作教授・財団法人水島地域環境再生財団の塩飽敏史研究員の先生による「海底ごみの現状と問題」と称する環境座学講義（写真⑤⑥）を開催しました。

＜写真⑤　磯部　作教授の事前講義＞

＜写真⑥　塩飽敏史先生の事前講義＞

③視察見学後、男木島漁協の会議室において同中学校小柳教諭の指導の基、自由研究の定義付け等の授業（写真⑦）、直接漁師さんへの質問（写真⑨）、みずしま財団の先生のアドバイス（写真⑧）を受けながら、充実した環境学習会と成りました。

＜写真⑦　小柳教諭の授業＞

＜写真⑧　磯部、塩飽両先生からのアドバイス＞

＜写真⑨　漁師・谷川さんへの質問＞

＜写真⑩　学習会終了後参加者全員集合＞

B）問題提起と解決方法を考えよう。

①９月上旬より、高松市立高松第一中学校小柳教諭の指導のもと、それぞれが感じた点や問題点を自由研究として取り纏める。

②　１０月の自由研究発表大会において各自発表をする。

C）多くの友達にも伝えよう。

①１２月上旬をめどに、小柳教諭の指導のもと教材用テキストを作成する。

②平成２３年１月、完成した教材テキストを印刷・製本し県内学校関係に配本する。

3. 事業の効果

海底堆積ゴミの問題は、海岸漂着ゴミと同様に陸域部・海域部の両方に起因して発生するものですが、普段私たちの目に触れる機会が少ないために見過ごされてきたという経緯があります。

そこで、私たちは小型底引網漁業者の手を借りて多くの市民に実際に見てもらい現状を知ってもらう活動に着手しました。

この問題は、海底に沈む多くのゴミを回収することも、また、処理することも大切ですが、それ以上にゴミを出さない、排出抑制をする事が大切だと感じています。

そこで、市内の中学生に瀬戸内海の海底の現状を知ってもらい自由研究のテーマとして取り上げて頂く事で、より一層の排出抑制に向けた啓蒙が期待できると思います。

さらに、中学生が自らの目線で作り上げた自由研究を、担当教諭の指導のもと、１冊の冊子として纏めることで、より多くの子ども達に対して排出抑制に向けた啓蒙・啓発活動が出来るものと確信します。

今回の事業が、多くの子ども達の環境教育の一助になることを願っています。

以　　上